つるがしま里山サポートクラブ 通信

第１１号
2023. 04. 01
発行者
小澤邦彦
編集者
杉山行汪

クラブ創立２０周年を迎えて　　代表　小澤　邦彦

2002 年に市の募集で集まった仲間が、翌年には任意団体を設立し、2005 年には NPO を設立しました。

2025 年は NPO 設立後 20 年目になります。この間の活動経緯を思い出せば、2002 年の高徳神社市民の森での一年間の活動は、森の中での初めての活動でした。月一回の活動は、大変、楽しい一年間でした。2 年目以降、会員約 20 名で任意団体を設立し活動を開始しました。

以来、20 年間の社会や地域の変化を見ると、食料、水、エネルギーの争奪、民族・宗教間の対立激化、異常気象現象の頻発など、様々な社会の変化の中で、一人ひとりが生活に対する充足感を得られるような環境をどのように作り出していくのかが問われています。地域の自然資源を利用した健康で豊かな生活、自然の恵みの感動・共感を作り出していきたいと思っています。

NPO 法人つるがしま里山サポートクラブは、「地域の里山を次の世代に継承していく事」を目的に、市民の森を利用して、市民の皆様に里山の自然体験活動を通じて、里山の役割や大切さを理解してもらう活動に取り組んで来ました。

鶴ヶ島の市民の森は、市民緑地契約制度により設置された森で、5 号五味ヶ谷の森、8 号藤金市民の森の維持管理を中心に高倉市民の森の飯盛川の清掃活動、太田ヶ谷の森の管理に参加しています。

樹木の成長が集まり林となって森になっていくには長い時間が必要です。この里山を見守り大切にする気持ちは、子どもの頃の体験が大切という想いから、私たちの活動は子どもの森の体験活動を中心に取り組んで来ました。今の子ども達が 20 年後に、親となり子どもを連れて里山の活動に参加してくれること願っています。里山の保全活動が次の世代につながって行く事を祈念しているところです。クラブの会員も平均年齢は 74 歳を超え、我が国の健康寿命に達しています。しかし、会員の皆さんは元気で活動に参加され、楽しい活動時間を共有しています。

第一回飯盛川清流復活大作戦　2004.4.25

八十歳代に挑戦　　阿部　武則

昨年の５月にサポートクラブに再入会しました。暫らく休んでいましたがよろしくお願いします。

活動目的と実際の活動が気に入っています。宅地化が進み緑地が減少する昨今、残された森を整備し、若い世代の親子に森の大切さを教え遊びの機会を設けています。そのための道具が揃っていることや、メンバーが楽しそうに活動していて一緒に活動していると楽しくなります。

私も何だかんだと歳を重ね昨年７９歳を迎え、いよいよ終活の時期に入ったようです。そこで何か節目のことをやっておこうと思いたち、自分史を書き始めました。先ずは時系列に出来事を並べ始めました。今はエクセルという便利な道具があり、表形式にして思いつくままに書き込んでいます。

次に、私の性格は頑張り屋で辛抱強い。これは雪国で生まれ育ったからでしょうか。そのおかげで東京に出てきてから、一つの職場で４２年一筋に働き定年を迎えました。定年後もボランティア精神を生かし、自分のため、家族円満のために過ごしています。

１月～３月の主な活動

新年最初の行事は、高倉の森の整備です。併せて２本のご神木に注連縄を設置し御神酒で今年１年の安全祈願をしました。一方、五味ケ谷の森に鎮座する２つの神社と森の入り口に注連縄を張りに新年の祝いと安全祈願を行いました。

市と社協が推進する福祉ベンチプロジェクトは今年が初年度で当クラブは早速鶴ヶ島ほほえみの郷と一本松７号公園に寄贈しました。当クラブの製材機はこれからはフル稼働するでしょう。

全国的に樹木のナラ枯れの被害が蔓延しています。太田ヶ谷の森もだいぶやられており先ず２本伐採し、森内を流れる小川(大谷川の源流)の橋の設置に使いました。橋はいずれ周回散策路につながるでしょう。

１月～３月 活動実施

1/11(水)高倉市民の森整備
1/19(木) ほほえみの郷に福祉ﾍﾞﾝﾁ設置
1/22(日)木工教室
1/28(土)太田ヶ谷の森整備
2/04(土)五味ケ谷市民の森整備
2/15(水)小彼岸桜根巻作業
2/25(土)太田ヶ谷の森整備
3/04(土)木工教室
3/08(水)一本松７号公園に福祉ﾍﾞﾝﾁ設置
3/11(土)桜の接ぎ木作業
3/18(土)もろやま大類の森ﾌﾟﾚｰﾊﾟｰｸ応援

４月～６月 活動計画

4/15(土)東市民センター結桜まつり
4/22(土)五味ケ谷市民の森整備・総会
4/23(日)太田ヶ谷の森･高倉の森蛍放虫会
5/ 5(金)親子でタケノコ堀体験
5/10(水)小彼岸桜新芽採取
5/14(日)大谷川クリーン作戦
5/16(火)越生さくら公園新芽採取
5/27(土)飯盛川清流復活大作戦
6/10(土)高倉市民の森里山体験会
6/24(土)太田ヶ谷の森整備
6/30(金)藤小学校自然学習

スケジュールは雨などで変更が有るかも知れませんので、当ｸﾗﾌﾞＨＰで確認下さい。

最近のトピックス　　編集部

■太田ヶ谷の森のナラ枯れ樹木の伐採

全国的に樹木のなら枯れ減少が拡大しています。カシノナガキクイムシが媒介するナラ菌により、ミズナラ等が集団的に枯損する「ナラ枯れ」現象です。林野庁によると 2021 年度の全国のナラ枯れ被害量は 15.3 万㎥、3/3 に伐採した１本は凡そ４㎥なので４万本。この作業はこれからも続くでしょう。

■伐採した竹の自然へ還元

五味ケ谷の森は豊かな竹林が繁っています。この竹林も放置しておくと人の踏み込めないほどに密集してしまいます。一方青々としていた竹も 5～10 年すると黄色く変色して枯れていきます。竹林の整備として、枯れ竹、折れ竹、倒れ竹、混雑した竹を伐採し、ウッドチッパーで粉砕しています。チップは竹林に撒くとカブトムシの繁殖場に、枯れ葉と牛糞と混ぜると肥料になるようです。

■五味ケ谷の森の縮小

市民の森は地主の好意により市が借り上げ、市民の憩いの場として市が管理しています。しかし返還しなけれなならない事情も生じます。今般、五味ケ谷の森の一部が返還されました。これまで東市民センターの敷地から直接市民の森に入れましたが、これからはそれができなくなり一般道を迂回することになりました。市民の森の面積は少し小さくなりましたがまだまだ十分楽しめます。この森で行ってきた行事も引き続き継続していきます。

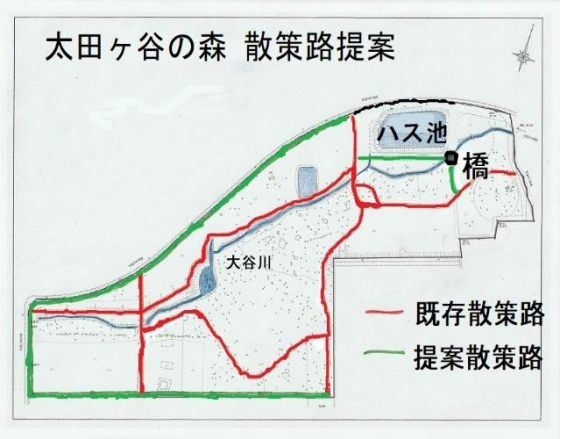
グリーンパークに周回散歩道を　　副代表　佐野　英樹

太田ヶ谷の森の大谷川に橋を架けました。森の中の倒木を利用した仮設の橋ですが、将来は恒久的な橋にかけ替える予定と聞いています。（場所はハス池の南で地図の●印の位置です）

ところが、この橋は森の中の既存の散策路と連絡していません。既存の散策路は右の地図に赤色で示されています。大谷川沿いを散策するように設計されています。

里山サポートクラブは、「小彼岸千本桜構想」の基に、市内にコヒガンザクラの植樹を行ってきました。太田ヶ谷の森では、北側道路沿いに百本近い植樹を行い、さらに増やすことを計画しています。

この桜が成長すると見事な桜並木が出来ることでしょう。そこで、この新しい橋を組み入れた森を周回する散策路を提案します。地図に緑色で示しました。満開のコヒガンザクラの下を皆さんがゆっくりと散策できる日が来るのが楽しみです。（この散策路はすでに「太田ヶ谷の森グランドワーク」に提案しています。）



小彼岸桜を太田ヶ谷に　　橋本　一郎

1997 年(平成９年) より東村山市で小彼岸桜の挿し木、育成、植樹を２５年間行ってきましたが、あっという間の歳月でした。その間、市内及び周辺の地域に二千本植樹しました。その後、終の住処を求めて鶴ヶ島市に転居しました。市内を巡回中に運動公園入口の街路樹「小彼岸桜」と出会い、鶴ヶ島でもと思い立ち「つるがしま里山サポートクラブ」に入会し皆様に声をかけました。千本を目標に一緒に活動を開始しました。初年度は「挿し木」から始めましたが結果は殆ど枯れ死して残念でした。「灌水は３年」と言われており、まず灌水から始まりと説明した時もあり「継続は力なり、そして挑戦」をモットーに頑張り続けて来ました。

「小彼岸桜」の「挿し木」は時期が合わないと発根せず、発根しても夏場にかけて根腐れが多く、成長が止まり枯れ死してなかなか秋に紅葉するまで元気で育ってくれないのです。培養土の調製を改良しつつクラブの仲間と頑張ってきて、昨年は６９本が育っています。この一年生苗を囲い場で１年～２年育成して植樹となります。このようにして育った苗木（三年生苗）を太田ヶ谷の森に市民に親しまれるようにと北側通路際に３年連続で植樹しました。道路の向かい側はＩＨＩが工場敷地内に植樹されました。数年後には西の方向に富士山を望んで見事な桜のトンネルになるでしょう。

森の東側はロボテックセンターが予定されており、敷地内の瀧島の湧水は大谷川に流れ込んでいます。湧水近辺は小彼岸桜 12 本と共に 10 品種以上の桜が植樹されています。桜の花と湧水のコラボレーションも見ごたえがあるでしょう。

圏央道入り口付近の道路にも街路樹として小彼岸桜を植樹できれば運動公園入口の街路樹と一体化して小彼岸桜の花が咲き誇る鶴ヶ島市となり人々が集まって来るでしょう。５年後が楽しみです。これからも苗木の植樹を続けて、後々の人への贈り物として残したいものです。

製材機の整備と樹木の伐採　　小嶋　道弘

製材機の整備

１０年程前に購入した製材機が使用されずに倉庫でお休みになっていました。機械を目覚めさせるために、この度、倉庫から久しぶりに外に出して日の目を見ることなったのです。外に出してみると、製材機本体は全体的にホコリがつもり、錆も発生し始めて悲しそうでした。エンジンを始動する前に、各部のほこりや汚れを拭き取り、各部の配線などを点検確認を実施し、次にオイル類を点検しました。オイルは劣化し、ミッションオイルはほとんど無く交換し、又、各部駆動部のグリス劣化もしており、各箇所に再グリスアップしてエンジンが再始動するかテストをしました。幸いエンジンは正常に運転回転、動くようになりました。その後に、数年前に伐採し放置されて野ざらしとなっていた檜木の木材を製材機にかけて試て、板になるか製材テストを行って見たところ結果は木材の外側は朽ちてしまっていましたが、内側芯材は素晴らしいカット材によみがえり、板材となって、製材機の機能は完全に復旧できました。

今後の課題として、保管、寝かせている伐採木を加工製材して再利用するのが良いのではないか。伐採した丸太を板材に製材した木材で、ベンチプロジェクト等、各種の製品開発に使用したら良いのではないかと思う。

雑木林とスズメバチについて

雑木林といえばまず浮かべるのがクヌギやコナラ。樹液の発酵臭に引きつけられた有象無象の虫たちのつくる「昆虫酒場」はよく知られています。カブト虫やクワガタ、オオムラサキといった人気者に混じって、スズメバチ、コガタスズメバチ、ヒメスズメバチといった大型連中は樹液に目がありません。特に四月ごろ越冬から目覚める女王にとって、樹液は重要なエネルギー源と考えられています。巨大な女王は姿こそ恐ろしものの、営巣前の大事な体の故か攻撃性は弱く、六月まではまず安全です。七月以降は事情が異なります。この時期に酒場にたむろするのは気の荒い働きバチです。なかでもオオスズメバチは縄張りを防衛する性質が極めて強く、巣仲間以外には敵対行動をします。オオスズメバチにうっかり手出しするのは賢明ではありません。

つるがしまサポートクラブでも、ここ数年間で里山での活動中にスズメバチハチに襲われた経験があります。全国では平均すると毎年４０数名がなくなっているそうです。ヒヤリハットの法則とは、1 件の重大な事故の背後には２９件の軽微な事故、300 件のヒヤッとしたこと、ハッとしたことがあるというものです。ヒヤッと感じたときには無理をしないで、現場から離れ、仲間に知らせ、リーダーの指示を仰ぎましょう。

太田ヶ谷の森をどう使うかの課題について

幅広い世代の人が交流ができ安心して使える公園、広々とした自然の原っぱを中心とした公園、周辺の環境と一体化し、歴史や自然を大切にする公園、自由な使い方の出来る公園を作っていきたい。

鶴ヶ島のバッタ類（その１）　　佐々木　英世

バッタの仲間は直翅目といわれる虫の中で後ろ足が発達している、トノサマバッタやオンブバッタ・エンマコオロギ・キリギリスなど跳ねる虫をいいます。早速ここで質問です！「バッタ」と「キリギリス」の違いが分かりますか？？といわれても、なかなか答えられませんよね。でも、ここをチェックすると簡単ですよ。**着目点①触覚（アンテナ）：細くて長いのがキリギリス・太くて短いのがバッタ**です。**着目点②：メスの尻の先に長い突起（産卵管といいます）があればキリギリスの仲間。**厳密にいうとちょっと違うのもいますが、おおざっぱにはこんな感じでいいと思います。ここで、「**コオロギも触覚が長いし産卵管がある**けど何？」と思われた方はいないでしょうか？こういうことに気が付く人は分類の才能があります。そうです！コオロギはキリギリスに近い仲間（キリギリス亜目に含まれる）なのでよく似ているんですね。このように**体の部分の特徴を調べて生き物に名前を付けたり、グループ分けすることを「分類」**といいます。そして分類を職業にするスペシャリストが「分類学者」です。生物多様性を語るうえで、生物をしっかり分類できることはとても重要なことです。バッタとキリギリスの違いが分かったところで、今回は鶴ヶ島のバッタについてのお話しします。

正直なところ、鶴ヶ島でバッタ類をきちんと調べた人はまだいないようで、鶴ヶ島に何種類のバッタがいるのかは不明です。でも、鶴ヶ島運動公園の周辺にはトノサマバッタ・クルマバッタモドキ・イボバッタ・ヒナバッタ・ショウリョウバッタ・コバネイナゴ・ツチイナゴ・ハラヒシバッタ・ハネナガヒシバッタなど色々な種類がいるようです。

ショウリョウバッタとオンブバッタは**頭の尖った種類**でポピュラーだと思います。でもこれらの見分け方が分からない人も多いようです、**ショウリョウバッタ**は別名キチキチバッタとも呼ばれ、オスは５cmくらいで細身。飛ぶときに前羽と後羽を打ち合わせて「キチキチキチ」と発音します。メスは巨大で10cm近くありほとんど飛ばない。**オンブバッタ**は４cm以下で、おんぶされている小さめな個体がオスです。また、オンブバッタは**目の後ろ側に白いイボが並ぶ**のが特徴です。**頭の丸い種類**で体が大きく（5 cm以上）薄い褐色のバッタで**目の下に線**があったら**ツチイナゴ**です。ツチイナゴは成虫で越冬するので、冬でも暖かい日には活動していて、よく飛翔します。目の下に線がないものは**トノサマバッタ**の可能性が高いです。トノサマバッタの体色には褐色から緑色まで、いろいろなバリエーションが見られます。小さい種類（5 cm以下）で**背中にＸ字の白い線**があったら、クルマバッタモドキかヒナバッタのどちらかです。次に羽に着目して、長さが腹と同じか短いなら**ヒナバッタ**。羽が長く、羽を開いたときに後ろばねが黄色くて真ん中に黒い帯があれば**クルマバッタモドキ**です。また、**ヒナバッタは埼玉県では希少生物（準絶滅危惧１型）**になっていますが、太田ヶ谷の森周辺では普通に見られるので不思議な感じがします。（続きます）

（鶴ヶ島の自然を守る会会員・大越昆虫館運営委員）

縄綯い再体験の記(続き)　　松下　貢

筆者は縄綯いも含めて手作業の農作業はすべて祖父から教わった。彼は厳しかったが、すぐには慣れない筆者を何度も繰り返し懇切丁寧に教えてくれた。押切りなどという、子供には危険極まりない道具も、春先の田んぼで祖父に教えられながら堆肥化した稲わらをそれで切ってばらまいたことを懐かしく思い出す。その祖父も筆者が小学4、5年生の頃に動けなくなり、小学6年生の時に亡くなったので、わらじ作りなどの伝統的な技能は教えてもらえずじまいだった。その上に、筆者が中学生になったころから耕運機が取り入れられたりして農作業の機械化が進み始め、手作業は次第に少なくなっていった。ただ、祖父に厳しく教えられたことでこの齢になってもずっと守り続けていることが一つある。それは、鎌や鍬などの「使い終わった道具は何であってもすぐに洗ったり研いだりして、次に必要になったときにそのまま使えるようにしておく」ことである。

大森さんが手に入れた縄綯い機に話を戻そう。本体は写真1に示した通りで、その運転は写真2で分かるように、両足で交互に踏み込んで縄の巻取りドラムを回転させ、2つある「ウサギの耳穴」に藁などの縄の素材を一つまみずつ交互に差し込む。すると、「ウサギの耳穴」のずっと先の巻取りドラムが回転しているので、耳穴の二方から出た縄の材料は合体して捩れ、縄として綯われていく。このように理屈は簡単であり、縄綯いの速さは巻取りドラムの回転のための足踏みと「ウサギの耳穴」に材料を交互に差し込む動作をどれだけタイミングよくスムーズにし続けられるかで決まる。したがって、これも少し練習して慣れれば子供でもできることであり、初めはゆっくりでも次第にスピードを上げることができるようになる。筆者の子供時代は寒い農閑期のつらい仕事だったけれども、先日11月12日の「秋の里山体験会」や19日の「第二はちの巣保育園秋祭り」での子供たちの縄綯い機の体験の様子を見ていると、今の子供たちは結構楽しむのではないかと思われる。

写真：縄綯い機で足踏みをしながら、畳表をほぐしたイグサを両方の「ウサギの耳穴」に交互に差し込んで縄綯いをしているところ。二つの「ウサギの耳穴」から来たイグサの束が出会って捩れ、縄として綯われて巻取りドラム（左端下に一部が見えている）に巻かれていく様子が見て取れる。

今回は里山クラブ正会員の大森一史さんと杉山行汪さんに誘われて、9月27日にほぼ65年ぶりに縄綯い機による縄綯いの体験をすることができた。その様子が写真2である。縄綯いの素材は木槌で打って柔らかくした稲藁が普通である。しかし、いまは稲藁を手に入れるのが困難だということで、大森さんが近所の畳屋さんから無料で頂いた使用済み畳表をほぐしたイグサを使うことになった。筆者の印象では稲藁で綯った縄に比べてイグサの縄は少しゴワゴワしているようだが、強さと耐用性はこちらのほうが上であろう。

しかし、長い目で見た場合、稲藁による縄綯いも考慮したほうがいいかもしれない。本来、稲藁はむしろや俵、堆肥など、農家では使い道がいくらでもあったものだが、現在では稲作農家の厄介者になっているだけである。確かに1本1本の藁をただ束ねただけではほとんど使いようがない。しかし、それを綯って縄にすると、強くて物を束ねるのにほぼ万能に近いものになるのである。そのような稲藁が農家から手に入れられれば、自然に優しい縄がほぼ無償でできるわけであり、自然環境の大敵であるプラスチック製の縄紐などが今後ますます使えなくなることを考えると、里山サポートクラブでも稲藁による縄綯いも今後の事業として考慮してもよいのではなかろうか。

一二三富の会の紹介　　浜端　秀男

つるがしま里山サポートクラブとのお付き合いは、当会発足の翌年―2014 年(平成 26 年)から 10 年になります。この間、同じような性格を持つ近接している NPO として、お互いに交流を深めています。とくに、当会発足時には先輩の貴クラブの方々には、イベントの運営の仕方またそれに欠かせない助成金の申請方法など丁寧に教えていただきました。紙面をお借りして感謝申し上げます。本稿では当会の活動概要について、定款など基本的なものから大まかな活動内容などを紹介します。

当会は坂戸市中央部に位置する「第一住宅坂戸団地自治会」有志により 2013 年 10 月に発足しました。 NPO を作るきっかけになったのは、坂戸市の中央部に位置する同団地に近接していた「清水町自然公園」の消滅でした。同公園はいわゆる都市公園ではないのですが、住民が利用できる公園（公園相当の扱い）として坂戸市が 40 年近く地主から針広混合林を借り上げ、地元自治会である第一住宅自治会がその管理を任されていました。

2013 年に地主から突如閉鎖の意向が示され、地元自治会を中心とする市民による坂戸市への土地公有化・公園継続の要請運動もむなしく、自然林は壊されて宅地開発が進められました。

この事態を受け、閉鎖前の同自然公園を管理していたボランティア団体有志が集まり、まだ残っている市内の緑の保全、及び緑を生かしたまちづくりとともに、自然を活用した生産活動を進める循環型社会を目指すことで一致、NPO を結成することになったわけです。これが一二三富の会です。

一二三富の会の名称は江戸時代から循環型農業で知られている川越、三芳野、狭山、所沢にまたがる「三富」地域に由来しています。「三富」は「緑に富み、歴史に富み、人に富む」とも言われていますが、当会もそれらを理想に掲げ緑を生かしたまちづくりに励んでいます。

定款によると、「坂戸市及びその周辺地域における様々な市民との協働により、緑豊かなまちづくり、新たな地域ブランド等の開発、地域を担うリーダーの育成、高齢者の支援及び生きがいの増進、並びに IT 等の活用による人と人との交流の活発化を図ることにより、地域の魅力を高め、もって活力のある、他の地域にはない特色のある地域社会を創造することを目的とする。」となっています。

そのための主な事業の種類としては以下のことを掲げています。

① 緑ある環境と調和したまちづくりの調査、政策提言
② 緑地の保全及び活用に関する事業
③ 高齢者の支援及び生きがいの増進に関する事業
④ 地域商品等の開発、販売に関する事業
⑤ 前各号に掲げるものの他、この法人の目的を達成するために必要な事業

2021 年(平成 3 年)度の活動は次のとおりです。

1	市民の森整備	事業種類②	年間活動　24 日	
2	都市公園等の整備	事業種類②	年間活動　15 日	
3	八幡植栽地の整備	事業種類②	年間活動　12 日	
4	市民の森でのイベント	事業種類⑤	年間活動　 5 日	
5	野菜栽培	事業種類④	年間活動 348 日	ご近所の底力部会のグループ活動
6	マルシェの開設	事業種類④	年間活動　33 日	ご近所の底力部会のグループ活動
7	市民活動フェア参加	事業種類⑤	年間活動　 2 日	

上に示した表でも一部触れていますが、当会は活動内容により組織内を以下のように三グループに分けています。

1　緑を考える部会　　2　緑をつくる部会　　3　ご近助の底力部会

上表のなかで5,6は3「ご近所の底力部会」で概ね活動している30名のうち7～8名が属しています。当会発足当初から有機（EM）農法により地域商品の開発、販売を研究してきましたが、成果は今ひとつというところです。現在は第一住宅自治会集会所にて毎週1回のマルシェ（朝市）の開催、NPO直営畑で収穫した一般野菜をそのマルシェに出荷しています。

1～4及び7は　1緑を考える部会、2緑をつくる部会が担当しています。

「緑をつくる部会」は当会の最大部会で人数、活動日も最も多く、ほぼ会員全員(約30名)がこの部会には属しています。里山サポートクラブさんとイベントを通じ共に協力し合っているのはこの部会の担当です。

2014年(平成26年)から整備を始めた堀込の森は2018年(平成30年)坂戸市第一号「市民の森」として認定されました。以降、里山サポートクラブさんの支援も得て、「森のプレーパーク」「門松つくり」「工作教室」など毎年1回開催しており、当会のメインの活動場所になっています。昨年は市民の森開設5周年を記念して「森のコンサート」を開催、地元市民から高い評価を得ることができました。

「緑を考える部会」は、理事を中心に7～8名で構成され、主に「まちなか緑」など新規の助成計画策定、実施プラン作成などを担当しています。「活動の一覧表」のなかで3番目に八幡植栽地と記していますが、ここは長い間市有地であったが礫混じりの荒れ地でした。この300㎡の荒れ地を重機で掘削して良土に換え、そこにミツバツツジの並木植樹を構想しました。「まちなか緑化事業」として全体構想を2015年(平成27年)埼玉県に提案するとともに、その一部の八幡市有地について、2019年(令和元年)「トヨタ自動車環境活動助成事業」に応募しました。幸運にも採択されその助成により約300㎡のツツジの並木を作りました。その後2カ年にわたり埼玉県の助成も得て、多年草7種の栽培も始め、四季を通じ楽しめる花木園として整備しました。

以上当会の活動概要を述べましたが、全員参加の活動だけでもおおよそ年間60日、一月では平均5日に達しています。これに加え上に示したようにグループ活動も実施しています。高齢者集団であることを考えると限度に近い活動になっているのが現状です。

その意味でもイベントにおいての里山サポートクラブさんの応援は大変有り難く思っています。今後後継者問題、活動資金の安定した調達等同じような課題を抱えている両団体が、お互いに助け合い、また知恵を出し合い、未来につながる活動団体として、共に発展していくことを強く願い本稿を閉めます。

（ＮＰＯ法人　一二三富の会 代表理事）

彩の国埼玉県環境優秀賞の受賞

2月9日に、NPO法人つるがしま里山サポートクラブは、彩の国埼玉県環境大賞優秀賞の表彰を受けました。

市民の森を中心に子ども達や保護者に森を体験してもらい、その大切さを考えてもらうことを目的に2003年(平成15年)に設立し、20年にわたり継続して各種イベントを開催。学童クラブや学校、地域の他の団体とも連携し、里山調査、植樹なども展開、10haを超える市民の森の清掃活動も取り組み、地域における環境への関心を高めている。

編集後記

里山サポートクラブは創立して20周年となりました。活動の場と、取り組みの範囲は広がる一方ですが、それにも増してメンバーの高齢化も進んでいます。意気軒高な仲間に交われば自分も朱になれるでしょう。誰でも何時でも参加してください。　　ホームページ：http://www.satoyamasupport.com/